



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動と
その特質(その1)

-宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組1

「かかわる力」の目標系統表とその成立経緯を中心
に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2014-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安藤, 真二, 鵜戸, 周成, 瀬戸山, 由香里, 河原, 国男, Sinji, Ando, Udo, Shusei, Setoyama, Yukari メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5801

「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質 (その1)

— 宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組①
「かかわる力」の目標系統表とその成立経緯を中心に —

安藤真二* 鶴戸周成** 瀬戸山由香里*** 河原国男

The Characteristics of Unified Educational Activities from Kindergarten and to Early Secondary Levels in order to Foster Each Child's Abilities to Relate to Others and Things (Part1) : Focusing on Main Theme, Sequence of Objectives from Kindergarten to Early Secondary Level and Its Backgrounds

Sinji ANDO*, Shusei UDO, Yukari SETOYAMA*** and Kunio KAWAHARA**

1 課題と方法

本稿は一連の論稿とともに(以下、本研究)、国立大学法人宮崎大学教育文化学部(平成28年度以降は教育学部)附属幼稚園・小学校・中学校(以下、3附属学校園)において「かかわる力」を育むということが一貫した教育目標としてどう位置付けられ、どのような教育活動として展開しているかをまとめ、その取組の特質を考察するものである。

本学校園において「かかわる力」の概念をどのように捉えるかは、本稿で明らかにするが、ここでは最低限の背景について確認しておこう。

「かかわる力」は、けっして新規な目標ではない。わが国で児童生徒等が学習主体として、なにかしらの対象に「かかわる」ことが「かかわる力」として、すでに包括的に教育目標として価値付けられ設定されている状況がある。¹⁾

こうした状況をわが国において促した社会的出来事、動向があった。「脱社会化」ともいわれる凶悪な少年事件に対する反省、「引きこもり」事案への対応、社会関係資本の重要性についての認識、などが関連する出来事、動向として考えられる。その種の背景要因に関する問題自体興味深い研究課題になるが、「生きる力」(平成8年中教審答申)の理念設定を目安と受けとめると、最近20年の出来事といえる。

「かかわる力」の目標設定が最近年の出来事であるにしても、学習主体として個人が環境とどのように「かかわる」か、という側面について教育学の蓄積に着目した場合、われわれは、関連する研究関心を見出すことができる。その代表的な事例の1つは、「経験」の概念を提出していた、ほぼ1世紀前のデューイ(John Dewey 1859-1952)の所説である。²⁾ こうした背景をわれわれはそのつど意識しながら、「かかわる力」という目標について性格づける必要がある。「かかわる力」は、その文字通りの名称を用いるかどうか、また、目標として強調されているか、

*宮崎大学教育文化学部附属中学校校長

**同附属小学校校長

***同附属幼稚園園長

方法的側面で強調されているかは別にして、今日のわが国の学校教育において、実践的意義をもつものとして重んじられている。その基本的特徴は、次のように指摘できる。

1) 幼児教育から高等教育の各段階で重んじられている継続的な資質能力要素である。一要素であるが、幼児教育段階でとくに重んじられているように、外的対象にかかわる諸個人の意欲的活動性を重んずる点で人間形成の基盤的意味を持っている。

2) 3 附属学校園内にとどまらず、実際生活の諸課題の解決に資する「力」として期待されている。

3) 学力の側面とともに人間性の側面との側面に関するものとして把握されている。

こうした意味を含んだ「かかわる力」の用例とその実践に関する実績を踏まえて、われわれは、以下のような実践的仮説を設定する。

「かかわる力」を育むことを教育目標として意識し、3 附属学校園における幼小中12年間、その資質能力要素を目指して教科等を通じて系統的に持続的に育成することによって、下記の成果が導かれるであろう。

①「義務教育」の目標の重要部分を教科横断的な汎用性をもって効果的に達成して、後期中等教育と適切に接続し、高等教育段階で求められる課題発見と課題解決に向けた主体的・協働的な学習を推し進める基礎力として貢献するであろう。

②以上①の実現によって幼稚園・小学校・中学校それぞれの研究テーマに沿った提案的な授業実践に対して推進的な役割を果たすであろう。

③以上の①②の実現によって幼稚園教育を含めて、育成する資質能力を明確化した「小中一貫型小・中学校」（平成26年中教審答申「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟な効果的な教育システムの構築について」）を具体的な姿として示すことができるだろう。その場合、幼小中、それぞれにおいてすでに設定されている教育目標に対しても、根底的で、推進的、親和的な役割を果たすであろう。

④以上①、②、③によって、小中一貫教育を適切・効果的に進めることのできる教員を養成する学部教育に対しても、有意義な実践事例を提示することができるであろう。

本研究は、以上の仮説の検証結果を報告するものではない。本研究は、3 附属学校園が「かかわる力」は一貫した教育目標としてどう位置付けられ、どのような教育活動として展開しているかを整理し、その取組の状況とその特質を考察することを課題とする。

この課題に対して、本研究は以下の方法で接近する。

1) 「かかわる力」という目標が3 附属学校園の取組においてどのような経緯で自覚化されてきたかその事実関係を前提として確認する。

2) 「かかわる力」の概念を3 附属学校園でどのように明確化したか、幼小中の学校段階に即し、その資質能力の要素で把握する。

3) 教育活動の展開を4つの局面で捉える。①3 附属学校園それぞれで「かかわる力」を育成することをもっとも明瞭な形で自覚して設定している教育活動においてどう実践されているか。②3 附属学校園それぞれで“附属学校園ならではの”といえる特徴的な教育活動においてどう「かかわる力」が育成されているか。③「交流及び共同学習」においてどう「かかわる力」が育成されているか。④「好きな遊び」（自由遊び）、教科等、教育実習等の基盤的な実践においてどう「かかわる力」が育成されているか。

4) 以上の取組状況を踏まえて、3 附属学校園が設定する「かかわる力」の育成がどのような

具体的姿を示した特質を示しているか、類似する先進校の取組を参照比較しながら考察する。

1への注

1) 「かかわる力」は、「生きる力」の諸要素と関連するものとして、幼小中高の各段階で、学校現場で重んじられてきている。幼児教育分野では、「かかわる力」という名称で重んじられてきた。

小学校では「かかわる力」という名称が用いられなくとも、「学び合い」「つながりを通じて学びを開く」「コラボレーションが創り出す子どもの変容を求めて」のように、主として「学び」の基本的な手立てとして重んじられている。中学校段階では、生徒指導上の問題との関連で「社会性」「対人関係能力」等として重んじられてきた。幼小中一貫教育の現場では、「異学年交流」などとして重んじられてきた。キャリア教育では、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4つの能力領域に関連し、とくに「人間関係形成力」として平成23年答申以来重んじられてきた。OECDのキー・コンピテンシー（DeSeCo：Definition and Selection of Competencies、コンピテンシーの定義と選択）ではとくに「異質な人々からなる集団で相互にかかわり合う力」（人間関係力・協働する力・問題解決力）として重んじられてきた。

2) ①環境が、自然であれ、人間であれ、情報を含む事物であれ、個人が「環境への働きかけを通じて自己を更新していく過程」（『民主主義と教育』第1章p.12）を想定できる。たんに刺激に対する反応の様式ではない。「試みること」（trying）という個人の主体性をデューイは「経験」の本質的契機として認めていた（第11章）。②「試みる」ことは、結果として「被ること」を不可欠に伴う。そのとき一定の行動の仕方と一定の結果とがどのように関連しているかを、「困難」な場面に出会うことによって、「試験的」（tentative）ないし「仮説的」（hypothetical）な思考によって、認識することができる。こうした思考と経験をデューイは「熟慮的」（reflective）な経験として特徴付けた。気まぐれな行動とも、一律的な行動とも、あるいは単に試行錯誤的な経験と区別して、この「熟慮的経験」は人間の成長にとって教育的に—学校教育に限らず—重要であると、デューイは説明していた（同上、第11章）。③こうした個人の「かかわる」活動は、「共に生活する」という過程を含む。集団との「かかわり」を含んでいる。それによって、「共同生活の一様式、連帯的な共同経験の一様式」として、多様な諸個人の能力の解放に通じ、「民主主義」の実現すること（同上、第7章）、のみならず、コミュニケーションのギブアンドテイクを通じて、各人が共同社会の独自の成員であるという有効な感覚を発展させ、「協働的な」結合関係をもたらし、「公衆」といってよい人間類型を成立させるとデューイは説明している（『公衆とその諸問題』第5章）

2 宮崎大学教育文化学部附属学校園について

あらかじめ本学部附属学校園について、最小限の基礎情報を呈示しておこう。3附属学校園は、学部キャンパス（市内木花台西）から十数kmは離れているが、1つの道路を挟んで併設している。それぞれ別個の教育目標と研究課題を設定している。

① 附属中学校

- ・創立：昭和22年（1947年）4月21日
- ・全校生徒：平成27年度490、男子250、女子：240（特別支援学級を含む）
- ・教員：校長：1（安藤真二）、教頭：1、指導教諭：1、主幹教諭：1、教諭：22、養護教諭：1、有期教諭：1、非常勤講師：3
- ・教育目標：「真理を探究し、勤労を愛する、気品のある生徒」の育成
- ・目指す生徒像：我等の目標の実現「一、自発的に学び、真理を探究しよう」、「一、勤労を愛し、仲間と協力しよう」、「一、気品を保ち、健康を増進しよう」
- ・研究主題：「社会で生きる汎用的な資質・能力を視野に入れたこれからの教科指導の在り方」

② 附属小学校

- ・創立：明治26年（1893年）4月10日
- ・全校児童：平成27年度 全児：642、男：312、女：330（※特別支援学級を含む。）
- ・教員：校長：1（鶴戸周成）、教頭：1、主幹教諭：1、教諭：21、養護教諭：1、有期教諭：2、非常勤講師：6
- ・教育目標：「ともだちいっぱい あせいっぱい まなびいっぱい」（社会の変化に自ら対応することができる豊かな心をもった児童の育成）
- ・目指す子どもの姿：明るくやさしい子（徳）元気でたくましい子（体）深く考え、高く伸びる子（知）
- ・研究主題：「切磋琢磨する子どもの育成」
「発達の段階に応じた体系的なキャリア教育の試行」（特別支援学級）

③ 附属幼稚園

- ・創立：昭和42年（1967年）6月20日
- ・園児総数：平成27年度97、男子：44、女子：53
- ・教員：園長：1（瀬戸山由香里）、教頭：1、教諭：4、養護教諭：1、非常勤講師：4
- ・教育目標：生き生きと活動できる子どもを育てる
- ・目指す幼児像：「友達と一緒に元気に遊ぶ子ども」
「自分の気持ちや考えを素直に表現できる子ども」
「進んで取り組み、工夫しながらやり遂げようとする子ども」
- ・研究主題：「かかわる力を育てる援助の在り方 ～一人一人の子どもを見つめて～（3年次）」

3 宮崎大学教育文化附属学校園の取組 — 「かかわる力」を目標設定するに至る経緯—

1) 平成14～16年度文部科学省研究開発学校

3 附属学校園では、平成14年度から3年間「文部科学省研究開発学校」として幼・小・中が一貫した教育課程（「もくせいプラン」）の編成に係る開発研究に取り組んだ。

以下には、本研究で教育目標として設定する「かかわる力」（表5）に関連する内容の一部を研究紀要（「確かな自分をつくる『ふぞく・もくせいプラン』の展開」）より抜粋紹介する。

教育課程「もくせいプラン」編成の概要

① 目的

地域や学校の実態及び子どもの発達の特性を考慮し、幼稚園・小学校・中学校と連続した学びの中で、子どもが豊かな人間性を養い、基礎・基本に支えられた確かな学力を培うことを目的として、教育課程「もくせいプラン」を編成した。

幼稚園、小学校、中学校と環境が変わっても、ストレスを感じることなく、子ども自らが豊かな人間性を養い、基礎・基本に支えられた確かな学力を身に付けていくことができるようにする。そのために、幼稚園から小学校、小学校から中学校へとつながる、学習活動や学習内容の変化を緩やかにする教育課程「もくせいプラン」を編成していくことが必要であるとする。

② 基本的な考え方

幼稚園、小学校、中学校の子どもがともに学習したり、かかわったりする時間を設定していくことで、子どもの学びの広がりや期待するとともに、友達のよさや自分自身のよさに気付いていくことを期待し、以下のような観点で教育課程を編成していくことにした。

i) 連続した学びの中で、子どもが豊かな人間性を養い、基礎・基本に支えられた確かな学力を培う教育課程の編成

- ・幼稚園から小学校、小学校から中学校へとつながる連続した教育課程の編成
- ・子どもが豊かな人間性を養い、基礎・基本に支えられた確かな学力を培う教育課程の編成

ii) 子どもの発達の特性を考慮したゆとりある総合的な教育課程の編成

- ・子どもの学びの広がりや支援する教育課程の編成
- ・子どもにとって充実した総合的な教育課程の編成 — 学校2学期制の導入

iii) 地域や学校の特色を生かした教育課程の編成

- ・地域に根ざした教育活動ができる教育課程の編成
- ・地域の教育資源や学習環境への積極的な連携を図る教育課程の編成

iv) 実践的な教育課程の編成

- ・日々の実践的研究に基づいた教育課程の編成

編成においては、新教科「くらし科」「生活総合科」（「表現科」を含む）の創設（小学校）及びコミュニケーションスキルを目的とした「もくせいの時間」の創設（小学校・中学校）が特色として挙げられる。

③ 「もくせいプラン」(学習プラン)

次の表1は、「もくせいプラン」の一例（小学校第4学年の学習プラン：部分掲載）である。

表1 附属小学校 「もくせいプラン」の例

平成16年度 4年3組学習プラン							
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
行事等	入学式 春の遠足 家庭訪問	プール開き ささの葉運動会 表現集会発表	PTCA活動 PTCA家庭内実践	PTCA活動 PTCA家庭内実践	PTCA活動 PTCA家庭内実践	PTCA活動 PTCA家庭内実践	PTCA活動 PTCA家庭内実践
今月の歌		運動会の歌、風よるけふけ	緑のラララ	気球にのってどこまでも			
学年の集い	かがやき学年暮開け	かがやけTeacher 1	かがやきチャレンジ	かがやき発表会1			
国語	○縦字や横字が伝わるように【はらこぎのどかえつて(物)】 【よかつた器あ(詩)】 ●異字同音の「かきかき」 ○毛筆のしせい、毛筆で書こう	○知らせたい、あんなことこんなこと ●主題と述語の関係をとらえよう ●漢字の読み方に気をつけよう ○組み立てて書く(体)	○だん頂とだん底の関係を書き【ヤドカリとイソギンチャク】 ●読者の読み方に気をつけよう ○組み立てて書く(体)	○本のしょうかい文を書こう【あ・し・あ・と(物)】 ●読者のまど(本しぎな世界)を築け ○組み立てて書く(体)			
くらし	水はどこからくるの(14)		見つめてみよう！くらしの中のゴミ(18)				
算数	大きな数(2)	わり算(1)(2)	円と球(7)	小数(9)	折れ線グラフ(6)	面積(8)	ふりかえり(6)
理科	芽ばえのころ(7)		空気と水のふしぎ(9)		葉がしげるころ(6)	月と星(10)	
表現	日本のふし④ まよいこんだふしぎな世界④		ふしのままりや拍子を感じて⑦		おもしろムービー⑧	ころがれころがれ⑧	音楽であそぼう⑧
体育	力試しの運動(3)	かけっこ・リレー・ハードル走の表現、リズムダンス(8)	水泳(8)		保健「体の発育・発達と食事」(2)		

PTCA
見つけてみる
水を大よぶ
にに
つするた
てした
のめち
家の
実践
活動
活動！

自主
的
な
学
習
の
進
展
を
支
援
す
る
た
り
き
を
行
な
す

④ 「もくせいプラン」から見える「かかわる力」

i) 「小学校と中学校の教科内における学習内容の再編」から

小、中の連続した教育課程の中で基礎・基本に支えられた確かな学力を身に付けさせるために、学習内容の再編を行った。また、子どもの学びの広がりを期待するとともに、他の人のよさや自分自身のよさに気付いていくことを期待して、異学年及び校種を越えた合同学習を実施した。

ii) 「小学校との連携のための幼稚園における集団活動」から

幼稚園において子どもに育てたい力を、“かわる力” “考える力” “表現する力” の3つとした。

3、4歳児において、自己を表出しながら教師から受け入れられ安心感をもつようになると、自分でいろいろな活動に取り組むようになる。その中で、自分以外の子どもの存在に気付き、かかわりたいという気持ちが高まっていくこととなった。

5歳児になると、友達とかかわることを通して、自己の存在感を確認し、自分と他者の違いに気付き、他者への思いやりを深め、集団への参加意識が高まり、自律性を身に付けていく。そのため、集団の中の一人であることに気付き、集団での活動への積極的な参加意欲を育むために集団活動に取り組む時間を設定した。

このような経験を積み重ねることで子どもに育てたい力がさらに生まれ、自分からかかわろうという意欲をもつことができ、小学校での生活もスムーズに始められる契機となった。

iii) 「もくせいの時間（コミュニケーションスキル学習）」の取組から

身の回りで発生している様々な問題の背景には、人とかかわり方を知らない子ども、かかわり方を知っていても実践する技能や態度が身に付いていない子どもが増えてきていることが挙げられる。そこで、「もくせいの時間」においては、子どもの対人関係能力を育てるためにコミュニケーションスキル学習に取り組むことにした。

コミュニケーションスキルとは、ソーシャルスキルの一つであり、自分の思いを伝えたり、言葉をかけたりするなど他人にかかわる際に使う技能のことである。それが自分の思い通りに伝わればよいが、言葉遣いや表情、態度等が適切でないため、相手に誤解され、意図していない伝わり方をすることもあり、人間関係がうまくいかないこともある。そこで、このコミュニケーションスキル学習では、自分の意見を適切にまた気持ちよく相手に伝えるためのスキルを学習することとした。その点で、本研究でいう「かかわる力」、主として「傾聴力・発信力」表5を育むものであった。

こうしたスキル学習を通じて、お互いが遠慮なく思っていることを伝え合うことができ、対等な人間関係の中でいろいろな問題を話し合ったり、解決を図ったりすることができると考えた。また、このコミュニケーションスキルは、どんな子どもでも訓練することにより必ず身に付けることができるものであると考えている。

2) 平成17年度以降の各学校園における取組

① 附属幼稚園の取組

i) 研究テーマ

平成17年度から今年度（平成27年度）までの研究テーマは、次のとおりである（表2）。

表2 附属幼稚園 研究テーマ

年 度	研究テーマ
平成17年度	かかわる力を育てる援助の在り方
平成18年度～平成20年度	かかわる力を育てる援助の在り方 ～運動遊びの視点から～
平成21年度～平成23年度	かかわる力を育てる援助の在り方 ～わらべうた遊びを通して～
平成24年度	かかわる力を育てる援助の在り方 ～子どもの姿に寄り添った教育課程の編成～
平成25年度～平成27年度	かかわる力を育てる援助の在り方 ～一人一人の子どもを見つめて～

ii) 教育活動

・平成17年度

幼稚園での生活が分からない子どもや、初めての活動に参加しようとしないう子ども等の姿にスポットを当て、保育カンファレンスを通して、「かかわる力」を育てるための援助の在り方の研究をした。また、コミュニケーションスキル活動においては、人とかかわる方法を具体的に教えるために5歳児の「もくせい時間」を継続しながら、平成17年度からは、3歳児、4歳児のコミュニケーションスキル活動にも取り組んだ。

・平成18年度～平成20年度

「かかわる力を育てる援助の在り方」の主題のもと、3年間運動遊びに視点をのこした研究を行った。運動遊びに消極的な子どもを事例として取り上げて、「かかわる力」を育むための保育カンファレンスを行い、子どもが楽しみながら運動遊びや友達にかかわることができる援助の在り方を研究した。「各年齢の運動遊びの実態」「卒園するまでに経験させたい運動遊び」「主な運動遊びの時期」「運動遊びつなげる基礎的な動き」について、見直しを重ねまとめた。

集団活動・交流活動の研究については、平成18年度から、5歳児が地域への興味・関心をもち、いろいろな人や施設に触れる機会をつくるために、近隣の保育園との交流活動を始めた。5歳児の集団活動や小学生との交流活動、保育園児との交流活動について年間計画を見直し、より子どもの実態や興味・関心に合うと予想される活動内容を取り入れながら指導内容や方法の改善に努めた。

・平成21年度～平成23年度

「かかわる力を育てる援助の在り方」の主題のもと、3年間わらべうた遊びに視点をのこした研究を行った。

平成22年度から、ストレスマネジメント教育「リラックスタイム」の研究に取り組んだ。

4歳児クラスで実践し、「リラックスタイムだより」を発行し、家庭との連携を図った。5歳児の集団活動や小学生との交流活動、保育園児との交流活動については、年間計画や内容を見直し、子どもの実態や興味・関心に合う内容や身に付けてほしい内容を取り入れながら指導内容や方法の改善をし、実践後は、事後考察を行った。交流活動では、教師間で年間計画を作成し、事前の打合せや事後の反省、情報交換を行い、活動の充実を図るとともに、課題を明らかにすることができた。

・平成24年度

本園の教育目標、保育方針、各年齢の指導計画、コミュニケーションスキル活動、集団活動と交流活動、運動遊び、わらべうた遊びについてまとめた「もくせいプラン教育課程」を作成した。

・平成25年度～平成27年度

“かかわる力”を育てるために子どもの実態に合った教師の援助の在り方について研究を行った。具体的には、子ども一人一人に合った長期目標、短期目標を立てて、援助を行い、定期的に、全職員による保育カンファレンスを行い、その援助がよかったのか、あるいは、他の援助が効果的なのか検討した。ストレスマネジメント教育「リラックスタイム」については、4歳児クラスで実践した。毎回「リラックスタイムだより」で活動内容の紹介をし、保護者からは家での様子等を知らせてもらい、家庭との連携を図った。また、平成26年度は、5歳児クラスでも12月に1回実施した。

iii) 「かかわる力」の育成との関連

附属幼稚園では、“かかわる力”“考える力”“表現する力”の3つの力を育てたいと考えている。その中でも、「かかわる力」を重要と考え、平成14年度以来「人・もの・こと・自然」にかかわる力を育てる研究に一貫して取り組んでいる。

「コミュニケーションスキル活動」「リラックスタイム」は、本研究でいう「かかわる力」(表5)のうち、「傾聴力・発信力」「状況把握力」と関連が深い。「運動遊び」「わらべうた遊び」「集団活動・交流活動」では、「課題設定力」「方法選択力」「課題遂行力」を身に付け、「かかわる力」の育成につながると考える。

② 附属小学校の取組

i) 研究テーマ

以下に、平成17年度以降、平成26年度までの研究テーマについて整理する(表3)。

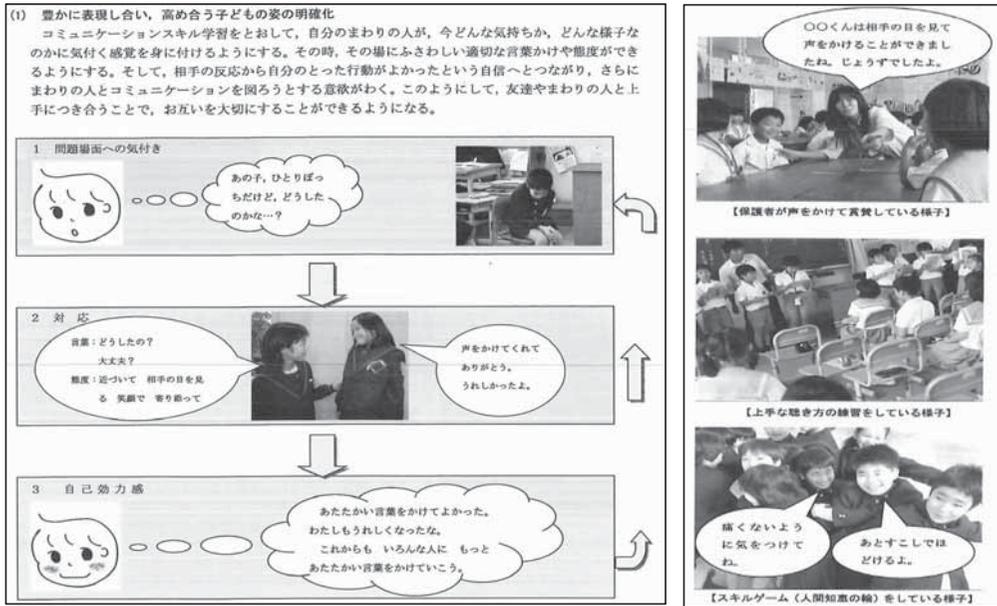
表3 附属小学校 研究テーマ

年 度	研究テーマ
平成17年度	ひと・もの・こととのかかわりを広げながら自分や他のよさに気づき、確かな自分をつくる子どもの姿を求めて -豊かに表現し合い、高め合う学習の展開-
平成18年度～ 平成21年度	確かな学びのある授業の創造 -表現し合い、高め合う学習の展開-
平成22年度～ 平成26年度	自信をもって学び合う子どもの育成 【22～24年度】 - 「子ども」と「教師」の視点を融合した学習の展開 - 【25年度】 - 思考内容の深まりをもたせる学習の展開 - 【26年度】 - 学びの実感を伴う学習指導の工夫 -

ii) 教育活動

・平成17年度

「ひと・もの・こと」とかかわって生まれた考えや思いなどを伝えながら共感し、お互いに自分自身の理解を深める学習を展開することによって、より確かな自分をつくる子どもを育成することができることを主として研究を進めた。



（平成17年度 附属小学校研究紀要より）

図1 附属小学校 コミュニケーションスキル学習の例

なかでも、「対人関係能力を身に付け、望ましい人間関係を築くとともに、自他ともに大切にしている子ども」をめざす子どもの姿として研究実践した「コミュニケーションスキル学習」の在り方が中心となった研究である（図1）。

コミュニケーションスキル学習の指導をとおして、問題場面の設定について学級や学年の実態を担任相互で話し合う機会が増え、このことにより問題場面を子どもがより身近な問題として捉えることができるようになり、自分たちの問題として取り組むようになったことが研究の成果としてあげられる。

・平成18年度から平成21年度

テーマにある「確かな学び」とは、

- ・子どもが各教科等における基礎的・基本的知識・技能を確実に身に付けること。
- ・身に付けた知識・技能を実際に活用しながら、豊かに表現し合い、高め合うことで、自分の考えに自信をもったり、新しい考えや方法などを創り出したりしていくこと。

として研究に取り組んだ。

全教科等をつうじて「言語活動の充実」が求められ、以下の3点を研究の視点とした。

- ・各教科における「言語活動」とは具体的にどのような活動で、それは、子どもにどのような力を付けるのか。
- ・他教科等（特に国語科）における言語活動とどう関連させれば効果的なのか。
- ・各教科等で研究してきた「単元・題材構成の工夫」「指導方法の工夫」「個に生きる評価の工夫」の具体的な取組とどう関連させれば、言語活動の質的な充実につながるのか。

これらの視点の究明につとめた。

・平成22年度から平成26年度

テーマにある「自信をもって学び合う」とは、

・主体的に他者とかかわりながら、自分たちが今もっている知識やこれまでの経験を活用し、よりよいものをつくっていくこと。

として研究に取り組んだ。

平成22年度から24年度は、「子ども」と「教師」の視点の融合」について、25年度は「思考内容の深まり」、26年度は、「学びの実感を伴う学習」について研究を深めた。

研究の最終年度となった26年度は、研究仮説を「思考力・判断力・表現力を高めることを根幹において、学びの実感を伴う学習指導を展開すれば、自信をもって学び合う子どもを育成することができるであろう。」とした。

iii) 「かかわる力」の育成との関連

附属小学校では、平成17年度以降の研究において、それぞれの研究テーマのもと研究副題を設定して実践的な研究を進めてきている。

特に「人・もの・こと」とのかかわりを視点において、「表現し合う」「高め合う」「思考内容の深まり」「学び合う（学びの実感）」等をキーワードにして、その学習指導の在り方について研究を深めてきている。そのそれぞれが、本研究でいう「かかわる力」（傾聴力・発信力、状況把握力、課題設定力、方法選択力、課題遂行力）に通じて研究の基盤となっている。

③ 附属中学校の取組

i) 研究テーマ

平成17年度から平成27年度までの研究テーマは、以下のとおりである（表4）。

表4 附属中学校 研究テーマ

年度	研究テーマ
17	コミュニケーション力を生かし、確かな学力の定着を図る指導法の研究
18	コミュニケーション力を生かし、確かな学力の定着を図る指導法の研究（2年次）
19	「読解力」を育成する授業展開の工夫 ～「言葉と体験」の具現化を目指して～
20	「読解力」を育成するための学習指導法の在り方 ～授業展開の工夫と「読解力」育成の時間の充実を通して～
21	「読解力」を育成するための学習指導法 ～言語活動の充実と人間力の育成の視点から～（3年次）
22	「人間力」を育む学校教育 ～各教科における言語活動の充実の視点から～（1年次）
23	「人間力」を育む学校教育 ～12の力の育成と言語活動の充実を目指して～（2年次）
24	「人間力」を育む学校教育 ～「人間力」を構成する内容を高め、生徒の変容を確実に見届けるために～（最終年度）
25	生徒のよりよい学びに向けたチャレンジⅠ ～公立中学校と附属中学校との確実な連携による強化指導の創造～

26	生徒のよりよい学びに向けたチャレンジⅡ ～個への手立てや教師コミュニティの活用の充実を通じた「確かな学力」の向上～
27	社会で活きる汎用的な資質・能力の育成を視野に入れたこれからの教科指導の在り方 ～深化を伴うアクティブラーニングの構築と実践を通して～

ii) 教育活動

上記の研究テーマ（表4）をもとに、教育活動を振り返ってみたい。

・平成17・18年度

「確かな学力」を生徒に確実に身につけさせるため、「コミュニケーション力」を柱に、基礎的・基本的な知識や技能の定着を図ること、加えて、定着した知識や技能を用いながら、「発展的な内容」の学習を行うことで、生徒の思考の発展を促すことを目指したものである。2年目は、「コミュニケーション力」を柱としながら、学習内容の連続性や深まりを重視し、加えて「発展的な内容」の学習を行うことで、更なる基礎的・基本的な知識や技能の定着を図ることとした。

・平成19・20・21年度

「PISA型読解力」の一側面、「情報の取り出し」、「テキストの解釈」、「一般的なレベルでのテキストの理解」、「テキストの内容と形式の熟考」をもとに「読解力」の要素を作成した。具体的には、抽出、吟味、理解・判断、表現の4要素である。この「読解力」とは、意味のやりとりができる力のことで、論理的に思考し、判断できることである。また、「言葉と体験」とは、日所の体験や授業での体験を教科のフィルターを通して思考し、それらの体験を表現しようとする一連の活動としている。このように「体験」を各教科の見方・考え方で「読解」という実践を目指したものである。

2年目は、前年度の課題を踏まえ、下記の3点について研究に取り組んだ。

- ・「読解」のプロセスの理論構築
- ・「読解力」育成の時間の設定
- ・「読解力」育成の研究における目指す生徒像の明確化

3年目は、前年度までの課題を踏まえ、下記の3点について研究に取り組んだ。

- ・「読解」のプロセスを意識した授業の展開
- ・総合的な学習の時間における「新もくせいの時間」設定とスキル学習の実施
- ・各教科実践において、「読解力」を効果的に育成する試み

・平成22・23・24年度

中央教育審議会教育課程部会で提唱された「人間力」に焦点化した取組である。「人間力」を「自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」とし、「人間力」を構成する内容を3つに明確化した。その上で、本校の考える「学力」、言語活動を位置付けた授業の構想、言語活動の充実を図るための共通実践事項等について提案した。

2年目は、構想した「もくせいの時間」を構成する3つの力「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を12の力に細分化し、発達段階に応じた授業を展開、実践した。また、各教科で、他教科との連携を図りながら言語活動の充実について研究を深めた。

3年目は、前年度までの課題を踏まえ、下記の3点について研究に取り組んだ。

- ・言語活動の充実を目指し、他教科との関連を図った授業実践
- ・「人間力」と各教科、広がりとの関係

・もくせいの時間における3年間の取組のまとめ

・平成25・26年度

地域貢献という側面から本校のこれまでの研究を概観し、宮崎市内の公立中学校教諭対象アンケート結果を踏まえ、公立中学校でも活用できるような教育実践を意識して、各教科で取り組むこととした。具体的には、大学や教育委員会との支援や助言を仰ぎながら、公立中学校等の教諭を共同研究者として、研究を進めることとした。

2年目は、前年度の課題を踏まえ、下記の2点について研究に取り組んだ。

- ・個への手立て（個を知る手立て、個を伸ばす手立て、個を生かす手立て）
- ・教師コミュニティの活用（公立中学校との連携、市・県教科研修会との連携）

・平成27年度

国立教育政策研究所の提唱する「21世紀型学力」の考え方を参考に、社会で生きる汎用的な資質・能力の育成を目指して、副題「各教科において深化を伴うアクティブラーニングの構築と実践を通して」をもとに、次の点について研究に取り組んだ。

- | | |
|----------------------|---------------------|
| ・社会で生きる汎用的な資質・能力の考え方 | ・学習の深化を伴わせる理由 |
| ・社会で生きる汎用的な資質 | ・能力の定義・単元（題材）や授業の設計 |
| ・授業や単元（題材）づくりの視座 | ・ルーブリックの作成 |
| ・アクティブラーニングの導入 | |

iii) 「かかわる力」の育成との関連

平成17年度以降の研究と「かかわる力」の育成（表5）について、5つの能力との関連性について以下のように整理することができよう。

平成17・18年度の研究は、主に「傾聴力・発進力」「課題設定力（第3項目）」「方法選択力（第2項目）」の能力に関連する内容であった。平成19～21年度の研究は、主に「状況把握力（第1項目）」「課題設定力（全項目）」「方法選択力（全項目）」の能力に関連する内容であった。また、平成22～24年度の研究は、主に「状況把握力」「課題設定力」「方法選択力」の全項目及び「課題遂行力」の能力に関連する内容であり、平成25・26年度及び平成27年度からの研究は、5つの能力全てに関連する内容であった。

このように、「かかわる力」との関連性は大きく、何らかの形でその育成に貢献するものであった。

3) 平成23～25年度特別経費プロジェクトーその成果と課題

本学部・研究科は平成23年度から25年度まで3年間、文科省の特別経費プロジェクトとして小中一貫教育支援研究を行った。この研究では、附属学校園は学部との共同研究によって、プロジェクト全体の構想のなかでは「基幹」として位置づけられ、実験的に試行することが期待された。この基幹的研究を踏まえて、主に対象とされたのは、県内公立小・中学校の連携の取組であり、公立の小中一貫校であった。その成果は、学部の紀要等とともに、下記の文献にまとめられている。

A：『小中一貫連携教育の理念と実践-「美郷科カリキュラム」の実践-』平成24.3

B：『小中一貫連携教育の実践的研究-これからの義務教育の創造を求めて-』平成25.3

その成果は下記のように、まとめられた。

- ・各教科を単位として現行教育課程を前提として、どのように小中一貫教育が進められるべき

か。その理論と実践について。→B

・県の教育課程開発の支援をうけた「総合的な学習の時間」を通じてどのように小中一貫教育が進められるべきか。その理論と実践について。→A（美郷南学園）

・小規模小中一貫校において、地域とともにある学校づくりを理念としてどのような工夫努力によって義務教育の質が確保できるように教育成果を上げることが出来るか。→B（笛水小中学校）

・人口減少地域以外も含めて、一般に小中一貫教育を推進する場合にどのような必要性が考えられるか、その基本諸類型について。→B（少子化対応、保護者ニーズ対応、特定の教育課題、学力底上げ）

・人口減少地域における小中一貫連携教育は、どのような史的基盤に支えられているか。→B
こうした成果の一方、重要な課題が残されていた。あるいは、継続的な課題として残された。

・小中連携もしくは小中一貫の取組は、どのような成果・効果を上げることができるか、その客観的検証の方法を確立し、実施すること。

・小規模の小中一貫校（20名程度）は、地域とともにある学校づくりによって、あるいはそれ以外の方策によって、どう存続可能になり、かつ義務教育の質を確保できるか。

・少子化問題は除外できる標準学級規模の小・中学校において、どのような特定の教育課題を設定することによって小中一貫連携を進めることが、義務教育の質を高めることに通ずるか。

3 附属学校園の場合、その教育目標においてどう一貫性を実現し、教育活動するか、という課題があった。上記の残された研究課題の3）に属する。「連絡進学」という形で進学の一貫性は、これまでも実施されていた。また、個々の学習活動において、幼小、小中、あるいは幼中での連携協力の関係はこれまでもあった。しかし、3 附属間の教育目標の一貫性については、それぞれの学校園において共通課題として意識されてこなかった。3年間の小中一貫教育支援研究プロジェクトのなかでも、追求されてこなかった。教育目標の一貫性を明らかにすることは、課題として残されたままであった。

4 「かかわる力」を育成する幼小中一貫する目標系統表 —その内容とその特質—

1) 「かかわる力」を育成する幼小中一貫する目標系統表

3 附属学校園の共通の教育目標を「かかわる力」とし、これに関する能力を附属学校園統括長・3 附属校園長との定例的な会議において、継続的に検討し、最終的に発達段階を踏まえた幼小中のマトリクス（表5）を作成した。

2) 系統表の特質

ここで提案する「かかわる力」（5つの能力）は、OECDのいうキーコンピテンシーの要素を含んでいる。この概念では、以下のような内容で構成されている。

- ・言語や知識、技術を相互作用的に活用する能力
- ・多様な集団による人間関係形成能力
- ・自律的に行動する能力
- ・これらの核となる「思慮深く考える力」

育成すべき資質・能力を踏まえつつ、教育目標・内容を、構造的に整理することを考える場合、「かかわる力」（5つの能力）は、文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会— 論点整理—について」（平成26年3月31日 p. 21）を参照すれば、

- ①教科等を横断する、認知的・社会的・情意的な汎用的なスキル（コンピテンシー）等に関わるもの
 - ②教科等の本質に関わるもの
 - ③教科等に固有の知識・個別スキルに関わるもの
- のうち、①の視点にあてはまるものと考えられる。

3 附属学校園でわれわれが設定する「かかわる力」は、教科横断的な基礎的・汎用的な資質・能力の要素として整理できる。

表5 「かかわる力」を育成する幼小中一貫する目標系統表

附属学校園における「かかわる力」について		宮崎大学教育文化学部附属学校園 H27.3.11 作成	
能力	幼稚園	小学校	中学校
傾聴力・発信力	・自分の考えを相手に分かるように話したり、友達の考えを聴いたりして、伝え合いながら、分かり合おうとする。	・相手の考え・意見を受け止めて、仲間同士の考えのよさや共通点・相違点を考えたり、複数の考えが整理できないか考えたりしながら聴くことができる。 ・相手の言いたいことが分かり、自分の言葉でも伝えることができる。	・相手の話をしっかり聴いてから、自他の考え方・意見を整理し、相手にわかりやすく伝えることができる。
状況把握力	・人やもの、自然にかかわる中で、自分と友達との考えや工夫の違いに気付くようになる。	・状況を判断するために、周囲からできるだけ正確な情報を得ようとする。 ・入手した情報をもとに自他の状況を冷静に見つめ、整理することができる。	・情報源に注意しながら、複数の情報源から正確な情報を得ることができる。 ・入手した情報をもとに、周囲の状況（配慮すべき対象も含めて）から自他が求められている役割や、自他のよさや特性を生かした役割を把握することができる。
課題設定力	・人やもの、自然にかかわりながら、同年齢や年下の友達と一緒にしたい遊びを決めて取り組もうとする。	・多様な情報を収集し、整理・分析するなどしてまとめることができる。 ・解決すべき問題について他者と意見を交流し、優先順位を考えながら課題を見出すことができる。	・自分の考えを他者の意見と比較しながら、解決すべき問題について、客観的に整理することができる。 ・解決すべき複数の問題群から、優先順位をつけて取り組むべき課題を明らかにすることができる。 ・課題を明確にするために他者の意見を積極的に求めることができる。また、意見を振り返り、交流してさらによいものにするができる。
方法選択力	・自分の気持ちや考えを自分らしく表現するために、ものにふれながら、言語的、身体的、音楽的、造形的な活動で試そうとしたり、工夫したりする。 ・園生活の中で生じる問題を解決するときに、先生と相談したり、友達と話したりしながら、公平なルールを考えたり、折り合いをつけようとする。	・課題解決に向けて、見通しをもち筋道を立てて方策を考えることができる。 ・今までに学んだ知識や収集した情報、経験を最大限に発揮し、様々な方法を用いて解決することができる。	・課題解決に向けて、進行状況や場の状況に合わせて、計画を立案・修正することができる。 ・今までに学んだ知識や収集した情報、経験を最大限に発揮し、お互いに協力して従来の常識や発想を転換したり、複数のものを組み合わせたりしながら新しいものや解決策をつくり出すことができる。
課題遂行力	・人やもの、自然にかかわりながら、積極的に好きな遊びに取り組む、達成感や充実感を味わう。	・何事に対しても、自分から、自分達から取り組み、与えられた仕事を責任もってやり遂げることができる。	・何事に対しても自発的に強い意志をもってかわり、最後までやり遂げることができる。

4 への注

1) 平成26年度より、原則毎月1回、統括長室(附属小)にて開催している。出席者は、附属学校園統括長、幼稚園長、小学校長、中学校長、場合によっては教頭等も含まれることがある。夕方17～18時開始し、概ね2時間程度である。協議された内容のうち、「かかわる力」に関する項目を下記に整理した(表6)。

表6 附属学校園統括長・校長打合せ連絡会議の協議内容等

[平成26年度]

回	協議・確認された内容等
3	かかわる力…幼・小・中それぞれの段階で育成に値する目標、もしくは方法的に重要な意味も持っている。共通テーマとして「かかわる力」を継続することとする。(7月)

「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質（その1）

— 宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組①

「かかわる力」の目標系統表とその成立経緯を中心に —

137

4	3 附属共通テーマについて…幼小中の連続性を意識した形式のマトリックスの提案（8月）
5	2 附属共通テーマについて（継続）…細分化されている到達目標を10程度で「かかわる力」の観点から絞ることの確認。3附属学校園では「かかわる力」を育成するためのリテラシーを、1 傾聴力・発信力、2 状況把握力、3 課題設定力、4 方法選択力、5 課題遂行能力の「5項目」で整理した。そして、「かかわる力」の育成のためにセレクトした10項目について、5項目のどれに該当するかを検討した。（9月）
6	3 附属共通テーマについて（継続）…「傾聴力・発信力」「状況把握力」「課題設定力」「方法選択力」「課題遂行力」を課題解決にかかわる行為プロセスに即して再整理する。（10月）
7	3 附属共通テーマについて（継続）…5つの行為プロセスについて幼小中の一連の行為を整理（11月）
8	3 附属共通テーマについて（継続）…次期学習指導要領の改訂方向（「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」- 要点整理 -）を参考に、コンピテンシーに関する位置付け整理の必要（12月）
9	3 附属共通の教育目標について（継続）…「かかわる力」に関するリテラシー表の基本的性格についての意見交換（1月）
10	3 附属共通の教育目標について（継続）…「かかわる力」に関するリテラシー表についての再検討（発達段階を踏まえたものか、重複記述がないか等）、本系統表が、教科横断的であり、幼小中の一貫性があること、特別支援学級在籍児にも適用可能であること、認知的、情意的、社会的な諸側面があること→一般的汎用性の高いリテラシーととらえることが可能ではないかとの意見（2月）
11	<p>広大附属三原学園から何を学ぶか（視察報告）…交流活動を基盤にした一貫教育による人間関係形成能力の育成、他者に働きかける力の育成等による人格形成に一定の効果が認められること、第三者評価委員会報告書の形式であることから3附属学校園の形式を整える必要性検討</p> <p>3 附属共通の教育目標について（継続）…批判的思考を育むことに関し、傾聴力・発信力に係る部分の字句表現修正→修正したものを3月11日の共同研究全体会で提示（3月）</p>

[平成27年度]

1	共通した教育目標「かかわる力」を育む学習活動の代表的事例（今後審議）（4月）
2	3 附属学校園における「かかわる力」を育む代表的な学習計画…①学年単位、または全校行事②具体的にイメージしやすいもの③毎年実施されるもの等について幼小中毎に説明（5月）
3	<p>附属学校園における「かかわる力」育成にかかわる実践活動状況について [内容構成案]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「かかわる力」を育むという教育目標設定について 2. 宮崎大学教育文化附属学校園の取組-「かかわる力」を目標設定するに至る経緯- 3. 「かかわる力」を育成する幼小中一貫する目標系統表-その内容とその特質- 4. 「かかわる力」を育む学びの諸様相-附属学校園における学習計画と実践- <ul style="list-style-type: none"> - 1) 主たる目標事項とする「領域」の時間において - 2) 各学校園での特徴的な「領域」上の取組のなかで - 3) 「交流及び合同学習」における実践とその成果 - 4) 各教科と「自由遊び」 5. 幼小中一貫して「かかわる力」を育成する教育実践-その意義（6月）
4	附属学校園における「かかわる力」育成にかかわる実践活動状況について（幼小中より報告）、21世紀型能力の概念は、授業実践での仮説的モデルとして位置付ける、「かかわる力」を育成するという概念は3附属学校園共通の教育目標としての位置付けるという考えか。（7月）

5	「かかわる力」の論文作成について（9月）
6	「かかわる力」の論文作成の進捗状況と内容構成について …実習生から見た「かかわる力」の検証も可能ではないか（10月）
7	「かかわる力」に関する論文原稿チェック、「かかわる力」はどのような姿で育成されているか についての総括的検討

このように、附属学校園における「かかわる力」をどうとらえるかについての協議は、積極的に実施し、具体的な教育活動を通して、検証することの確認ができた。

執筆分担：

- 1 河原国男
- 2 河原国男
- 3 1) 鶴戸周成
2) 瀬戸山由香里、鶴戸周成、安藤真二
3) 河原国男
- 4 安藤真二